

# Career Cruising

キャリア・クルージング

キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する何かがある。その何かを探するため、各界で活躍する「よき旅人」たちが迎ってきた航路を論考する。

取材／大久保幸夫、入倉由理子 文／入倉由理子(P56～58)、大久保幸夫(P59) 撮影／刑部友康

一度はあきらめたプロ棋士。  
将棋界の伝統を覆し、  
道を切り拓いた

奨励会会員→システムエンジニア→プロ棋士  
瀬川晶司氏

せがわ・しょうじ  
1970年生まれ。小学校5年生で将棋に夢中になり、6年生でプロを志す。中学3年生でプロ棋士養成機関、日本将棋連盟奨励会に入会。26歳のときブロー一步手前で年齢制限の規定により退会。その後神奈川大学法学部を経て、システム開発会社に就職。学生生活、仕事の傍ら、アマチュア棋士として活躍。2005年、日本将棋連盟にプロ入りを希望する嘆願書を提出、将棋のプロ編入試験に合格し、プロ棋士となる。『泣き虫しよったんの奇跡』（講談社）などの著書がある。

サラリーマンからプロの棋士へ転身。2005年、この話題で、瀬川晶司氏は世間を賑わした。「サラリーマンから〇〇」という転身は、今や決して珍しいことではない。しかし、これがプロの棋士となると話は違う。

プロの棋士になるには、基本的に日本将棋連盟のプロ養成機関「奨励会」に入会する。入会には奨励会試験を受験するが、数々の将棋大会で実績を残す10代の少年少女が集う試験の突破は狭き門である。入会が叶ったとしても、26歳までに四段を獲得できなければ、年齢制限により退会となる。プロになれるのは奨励会員の約2割と言われ、10代の前半、遅くとも後半から将棋の道にのみを精進してきた8割の若者が、異なる道を選ばざるを得ない。

瀬川氏が2005年、35歳でプロの棋士となる以前、奨励会以外のルートでプロの棋士になる道は閉ざされていた。つまり、瀬川氏がプロになったことは、瀬川氏自身の転身のみならず、プロへの新たな道を切り拓く、将棋界の「大事件」だったのだ。

### 小学校6年生でプロになるという志を抱く

瀬川氏は1970年生まれ。3人兄弟の末っ子として育った。小学校であまり目立たなかった彼が、小学校5年生のとき、クラス担任の先生との出会いによって大きな変貌を遂げた。

「生徒一人ひとりの個性を認め、褒めてくれる先生でした。それまで特別に褒められたことがなかった僕も、詩や作文を評価してもらえた。徐々に僕の物事に対する取り組み姿勢が前向きに変わっていったんです」

その頃、クラスで俄かに将棋ブームが起こった。休み時間ともなれば、あちこちで将棋を指す駒の音が響いた。瀬川氏は先んじて兄たちに将棋を教わっており、他の生徒よりも強く、クラスでも一目置かれる存在となった。

「注目されれば、もっと強くなりたくなる。やれば上達する。それがわかっただけ、自信が芽生えたのだと思います」

クラスでブームが去っても、将棋熱が冷めない瀬川氏を、父が神奈川県・港南台将棋センターへと連れていった。子どもから大人まで将棋好きが集う場で、瀬川氏は初めて「プロ」の棋士の存在を知った。

「将棋に熱中できてお金をもらえるなんて、当時の僕には夢のような話。気軽な気持ちでしたが、小学校6年生でプロになるという志を抱きました」

この後、中学生選抜選手権大会で全国優勝するなど実績を残し、中学3年で奨励会入会がなかった。プロへの道の第一歩を踏み出したのである。

奨励会への入会は、親が反対する場面が多いという。人生のやり直しという苦難に子どもが8割の確率で陥ることを、よしとしない親が多いのだろう。「そういう意味では、うちの両親は寛

### 瀬川晶司氏 キャリアヒストリー

現在	2005年	2004年	2001年	1999年	1998年	1997年	1996年	1992年	1985年	1984年	1983年	1981年	1980年	1970年
	35歳	34歳	31歳	29歳	28歳	27歳	26歳	21歳	15歳	14歳	13歳	11歳	10歳	0歳
	日本将棋連盟にプロ入りを希望する嘆願書を提出。念願のプロ棋士になる	プロとの公式戦の戦績が7割を超える勝率となる。プロを目指す決意	NECの関連会社に入社。システムエンジニアとなる	アマ名人戦優勝、対プロ戦7連勝など、アマチュア強豪として大活躍する	「好きなことをやれ」と応援し続けてくれた父が急逝	神奈川大学法学部入学 アマチュアとして指す楽しさに目覚めて将棋を再開	四段に昇段できず、年齢制限の規定により、奨励会退会	プロ棋士の一手手前の三段に昇段	高校に通いながら、奨励会会員として活動(1988年、18歳まで)	中学生選抜選手権大会で優勝 奨励会試験に合格し、入会	初めてプロ棋士養成機関・奨励会試験を受け、不合格に	父に連れられて港南台将棋センターに通い始める プロの棋士という仕事を知り、志を持つ	学校でブームが起きたことがきっかけで、将棋を始め、夢中になる	神奈川県横浜市生まれ 神極的で、あまり目立たない子どもだった
														

容でした。特に父は、口癖のように『好きなことをしろ』『仕事は好きな道を選べ』と言っていましたから」

## 一度は将棋と決別するが、再びアマチュアで活躍

奨励会に入会後、スタートは六級。そこからプロの資格を持つ四段を目指す。高校3年生のとき、三段から四段への昇段は年2回、26歳までに四段に昇段できなければ退会という「ルール変更」があった。

「奨励会入会当初は、将棋三昧の毎日が楽しかったし、まさか自分が26歳で退会の憂き目に遭うなどとは夢にも思いませんでした」

ところが年を重ねても四段への扉が開かれず、焦りとプレッシャーばかり



中学生選抜選手権大会の決勝戦。この優勝を経て、奨励会入会を果たす。

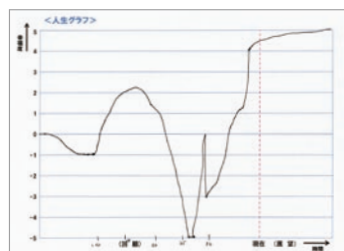
が増した。瀬川氏の風呂なしアパートに奨励会の仲間が集まり、酒を飲み、ゲームに興じることも多くなった。

「結局、26歳までに四段に昇段できずに退会。なぜ将棋だけに時間を費やさなかったのかと後悔ばかりが募りました。そして、同時に将棋すら憎むようになって、一生将棋など指すものか一度は心に決めたのです」

退会後、27歳で神奈川大学法学部に入学。学生生活を謳歌するなかで、瀬川氏の心は癒されていく。そして再び、アマチュアとして将棋を指し始める日がやってきた。時が経って落ち着いてみると、将棋を恨むのはお門違いだと気付いたのだ。「将棋は世界で一番面白いゲーム」。そう瀬川氏は言う。

アマチュアとしての瀬川氏の戦績は、目を瞠るものだった。アマ名人戦優勝、そして、成績優秀なアマチュアに参加資格が与えられるプロの公式戦において7連勝を飾り、対プロ勝率7割以上となった。いくら強いアマチュアでも、勝率が2割以上になることはまずないと言われる。

「奨励会時代のような勝つことだけを目的とした将棋が向かないのでしよう。アマチュアに戻り、子ども時代、楽しくて、真っ直ぐに将棋に向き合っていた時期の熱い思いが戻ってきました。だから、勝てたのだと思います」アマチュアとして活躍する時期と並行し、大学を卒業、NEC関連のシステム開発会社に入社する。プログラム



奨励会を退会した頃が「底」となり、アマチュアとして将棋を再開した後、また上り坂に。

のコーディングは、先を読みながらコードを書き進めていく。この仕事はどこか将棋に似ており、やりがいを持って仕事に取り組んだ。

## 前代未聞のプロ試験に合格。プロ・瀬川が誕生

社会人として、人に関わり、人に貢献しながら生きる。これは瀬川氏にとって新鮮な体験でもあった。

「でも、その一方で、本当に好きなことを仕事にできることは、どれほど素晴らしく、恵まれていたのだらうと気づきました。なぜ奨励会時代、もっと頑張れなかったのか。充実した毎日でも過ごしつつも、心の深いところでは再び後悔の念が芽生えていました」

そんなとき、アマチュアの友人に「プロにならないか」と持ちかけられた。瀬川氏にやる気があればサポートする、と。日本将棋連盟発足から約100年、戦前の混乱期の例外を除けば、奨励会以外の道でプロになった棋士はいなかった。そのような現実を前に、当初は瀬川氏も尻込みした。しかしその夜、自宅に帰り、その約7年前に他界した父の遺影が目に入った。「好きなことをしろ」。そう言い続けた父の顔を見て、もう一度挑戦しようという思いが込み上げてきたという。

アマチュアの仲間だけでなく、プロの棋士の諸先輩や友人が、日本将棋連盟に働きかけてくれた。最初は抵抗の色が強かった同連盟も、瀬川氏を支援する声を受け入れ、投票によってプロ試験の実施を決定。瀬川氏が六局中三勝すればプロとして認められる。果たして五局目で三勝し、2005年11月、プロ棋士・瀬川晶司が誕生した。「将棋連盟が僕にプロ試験のチャンスを与えてくれたこと、そして奨励会以外のプロへの道を開いてくれると約束してくれたことで、もしプロになれなくても十分満足できたはず」とは言うものの、奨励会員時代に通い続けた将棋会館で、再び対局室でプロとして将棋ができる喜びは、何ものにも代え難い。「プロになったからには勝ちたい。そして、トップに立ちたい。その一方で、将棋を心から楽しむ気持ちを忘れてはいけないと思います」

After Interview ▶ 瀬川晶司氏のキャリアをこう見る

## プロフェッショナリズムとアマチュアリズムの両方を知る唯一のプロ棋士

大久保幸夫 (ワークス研究所 所長)

将棋にはプロとアマという、似て非なる2つの世界がある。プロとは日本将棋連盟に所属する職業棋士であり、常に「棋譜を残す」という意識を持って将棋を指し、そこには一種の美意識が伴う。また将棋を「耐えるもの」「苦しいもの」として認識している。

一方アマとは、それを職業とはせず、将棋というゲームが好きで、生活の余裕のなかでそれを楽しみにしようという人々である。プロの道は、多くは小中学生の頃に意思決定し、奨励会というプロ養成機関に入会しなければならぬため、瀬川氏のようにプロとアマの両方の世界を経験した人は少ない。

### 勝つことと楽しむことを統合

プロとしてのスタートは後手になったが、彼は自身の特異な経歴を生かして「勝つことへのこだわり」と「指したい手を楽しむ指す」ことを統合しようとしているように見える。プロフェッショナリズムとアマチュアリズムの両方を知っていることを個性にしようとしているのだ。

### 瀬川流の将棋をつくる

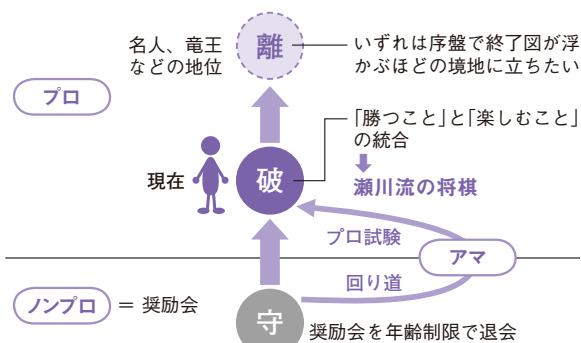
江戸後期の茶人・川上不白は茶道の道を「守・破・離」というプロセスで説明した。将棋にあてはめれば、先人たちが開発した棋譜や手順を習得する段階が「守」。

プロになり、自分ならではの戦型を加える段階が「破」。そして将棋界全体の発展を担い、「名人に定跡なし」と言われるように、先例にこだわらず新しい世界をつくり出すのが「離」の境地である。

「破」の入り口に立っている瀬川氏は、名前を伏せて棋譜を見せられても、これは瀬川の将棋だとわかってもらえるものを生み出すという目標を持っている。もちろん名人位に代表されるタイトルを取ることも目標だが、それはあくまで結果論に過ぎない。

「あまり王様を固めるのではなく、空中戦で自由奔放に指す将棋を自分らしい将棋としたい」と瀬川氏は言う。そういう将棋が過去のデータから見ても戦績がよいからではなく、そういう将棋が楽しいからだ。その戦法が勝利に結びついて、瀬川流と名付けられたとき、

### 「災」転じて「福」となす個性づくり



「破」の領域に達した証となる。

プロとアマの両方を経験した遅いスタートだからこそ、将棋界に貢献したいというモチベーションも高い。彼はNECという企業スポンサーを持つ唯一の棋士でもあるが、これもアマ時代の経験を生かしたひとつの貢献に違いない。アマからプロへ。この先例としての瀬川氏が将棋界にどのような変化を起こしてくれるか。それを期待して見ていきたい。